

ラグビー選手の契約について Contract of the rugby player

1K09B136 筒居洋祐
指導教員 主査 寒川恒夫 先生 副査 瀬戸邦弘 先生

第1章

はじめに

研究の背景

現代の日本において、ラグビーといえばマイナースポーツとしてのイメージを持つ人が大半であろう。たしかに、ラグビーを知らない人からしたら、アメフトと混合してしまっている人も少なくない。

そこで、まずは、ラグビーとは、どういうものかを歴史を振り返りながら、またそこから、世界のラグビーがアマチュアリズムからプロ化へとどういう経緯で変遷していったのかも同時に紹介していく。

研究の目的

世界のラグビーの歴史（主に北半球）とともにプロ化への変遷をみてきた。それを踏まえた上で、今回は、日本のプロ化に特化していこうと考える。そして、その上で、日本において、プロ契約のほうがいいのか、社員契約のほうがいいのかを検討する。

本論文の構成

本論文では、これから、社会人でラグビーをプレーする選手、またはすでにプレーしている選手に焦点をあて、インタビューを行った。そこで、プロ契約の選手と、社員契約の選手の違いについて、なぜ、それぞれの契約の道を選んだのかを聞いた。

そして、そのインタビューの結果を踏まえて自分なりに分析をし、現在の日本ラグビー界において、プロ契約のほうがいいのか、もしくは社員契約のほうがいいのか検証していく。

第2章 社員契約の選手、プロ契約の選手へインタビュー

本章では、社員契約の選手4人と、プロ契約の選手5人に対してインタビューをおこなった。内容は給与のこと、なぜその道を選んだのか、また社員契約、プロ契約のそれぞれのメリット・デメリットを中心に質問をした。

第3章 考察

本章では、2章でのインタビューの結果を踏まえて、分析していく。

分析項目は、社員契約とプロ契約の違い、それぞれの給与体系、なぜ社員契約、またはプロ契約を選んだのか、社員契約のメリット・デメリット、プロ契約のメリット・デメリットにわけて、まとめた。

第4章 結論

第3章での考察をもとに、はたして社員契約とプロ契約のどちらがいいのかを判断した。

具体的には、もともと、事前調査で日本のラグビー選手はプロ契約ができたものの、まだまだ、サッカーや野球に比べると、契約金や年俵が安い印象があった。プロ契約は社員契約とちがって社業をしなくていいわけだが、トップリーグを中心に社員契約であっても、そこまで、社業に追われるということはない。そして、リーマンショック後あたりを機に、多くの企業が不景気となり、その影響もやはり大きかったように思われる。つまり、トータルで判断したときに、やはり、プロ契約にはリスクが大きすぎるのではないかと思っていた。

そんな中でなぜ、社員契約ではなく、プロ契約を選んだのか。印象的だったのは、単純にラグビーが大好きで、その好きなことを少しでもいい環境でやりたい。中にはステップアップのために、まず日本のトップレベルでプレーをし、のちのちは海外でプレーしたく、その時にすぐ動けるようにプロ契約にしている選手もいたことだった。要は、やりたいことのためであつたら、多少のリスクは負わなければいけないわけで、それを気にしていたら、何もできないのだと改めて思い、それを実際にチャレンジしている人たちをみて、とてもかっこよくみえた。

一方で、同じプロ契約の中でも、リスクヘッジとして、大学の在学中に教員免許を取得している者、いま現在とっている者、また、引退後は社員として、会社に残れることを事前に確認の上で、そのチームを選んだ者など、ケースは様々ではあるが、各自がセカンドキャリアについても、案外しっかり考えているのだなと、感心した。そういうリスクヘッジがあるからこそ、ラグビー選手として、現役中はよりプレーに集中できると考えた結果なのだ。

いろいろと述べてきたが、最終的にはどこに重きを置くのか。給料の面なのか、ラグビー環境面なのかなど、それは人によって変わってくる場所であり、最終的には個人の価値観の違いで、他人が優劣をつけてはいけない。要は、人それぞれが自分の歩む道を、いかに真剣に考え具体的なビジョンをもって決定していくことが重要だ。